

國學院大學學術情報リポジトリ

紀行文のまなざし：澁澤龍彦『城』が語る幻想：
小特集日本近現代文学・その交通と交差

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安西, 晋二, Anzai, Shinji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000247

紀行文のまなざし

— 澁澤龍彦『城』が語る幻想 —

安西晋一

一、澁澤龍彦と紀行文

澁澤龍彦が初めてサドの居城址を訪れたのは、昭和五二年、四九歳の時であった。サドの翻訳・研究を長年続けてきた作家ではあるが、フランスのラコストにあるサドの居城址を訪れたのは意外にも遅い。彼自身、それまで「ラコストに行こうなどという考えが頭に思い浮かぶことさえなかった」という。

そもそも、澁澤龍彦が初めて海外を旅行したのが、昭和四五年のことである。また、海外旅行が珍しい時代ではあったのだ

ろうが、ブッキッシュな書齋派を通していた澁澤は、積極的に旅行に出ようとはしなかったようだ。以来、昭和六二年に五九歳で亡くなるまでの間、澁澤は、四度のヨーロッパ旅行に出ている。その旅行での日記は、澁澤の死後に『滞欧日記』と題され、刊行された。ヨーロッパ滞在時における澁澤の旅程を知る資料としても、また、旅を経て実感された彼の感動を看取する手がかりとしても、これは貴重な記録である。ただし、澁澤は、『滞欧日記』以外に、自らの旅の記憶および記録を残していないわけではない。むしろ、紀行文としてのそれらには、『滞欧日記』よりも、書齋の外部に広がる世界を観測していく澁澤の

まなざしと思考とが顕著であると考えられる。

そのような濹澤の紀行文は、単行本『ヨーロッパの乳房』(立風書房、昭和48・4)や『旅のモザイク』(人文書院、昭和51・6)などに収められている。『旅のモザイク』は、タイトルからわかるように、所収のエッセーが「旅」に関するものであり、なかには海外だけでなく、国内を取材した紀行文もある。「日本列島南から北へ」(「旅」昭和50・1〜4)という総題で発表された、全四篇からなる連作エッセーは、石垣島や阿蘇山、津軽半島、北海道のオホーツク海沿岸などがめぐられ、連載の前半で南、後半で北といった趣である。フランス文学の翻訳やヨーロッパの美術や文化に関する評論等を手がけてきた濹澤龍彦のイメージからすれば、『滞欧日記』に比して、日本国内の紀行文は異色にも感じられるだろう。しかし、日本の自然や風土を見聞し、あらためて語るこのような文章は、濹澤がどのように「日本」を捉え返しているのかを探る契機にもなる。

昭和五十六年一月、濹澤は、白水社より『城——夢想と現実のモニュメント』(以下、『城』)と題するエッセー集を刊行した。これは、白水社の雑誌「新劇」に、昭和五二年一〇月から十二月まで三回にわたり連載された、「日本風景論」という一種の紀行文シリーズ³⁾の企画で執筆されたエッセーをまとめたもの

である。第一章(「I」)と第三章(「III」)とは同一の旅程を分けた、日本の城(安土城、姫路城)を題材としたエッセーとなっており、第二章(「II」)は、同年六月の、ラコストにあるサドの居城址への旅を主としている。『城』は、西欧だけでなく、日本における城の建築様式や歴史、文化、さらには日本文学への言及を含む。いわば、紀行文という体裁をもちながらも、旅の記録に留まらない思索の過程が、濹澤によって問い直される(「日本」)の文化や風景といった側面をも表していると考えられるのである。そこで本稿では、『城』における論法を明らかにし、濹澤によって語り直される(「日本」)について検討したい。

二、『城』の論理

周知のように、安土城は、天正一〇(一五八二)年の山崎の戦い後に焼失したとされ、現在は、安土山に石垣などが残っているのみである。濹澤龍彦が、この安土城址を訪れたのは、昭和五二年五月二三日のことであった。『濹澤龍彦全集』第一七卷(河出書房新社、平成6・10)の「解題」(巖谷國士)には、「五月二十二日 彦根城を見る 彦根泊/同二十三日 安土城址を見る 彦根泊/同二十四日 姫路城を見る 神戸泊/同

二十五日 帰着」と、澁澤の旅程が記されている。また、この「解題」では、「旅行取材をするなら、まずなによりも織田信長の安土城址」と澁澤が提案したという初出連載にいたる経緯⁴も紹介されており、彼が信長と安土城に並々ならぬ関心を寄せていたことが知れる。三日間で三つの城をめぐるつつも、『城』では彦根城への言及はほとんどなく、姫路城についても安土城址に比すれば、澁澤の言葉はかなり少ない。そこでまずは、安土城址について書かれた、『城』の「I」から読み進めたい。

日本の城に関する記憶から始められる「I」は、白虎隊と会津若松城（鶴ヶ城）、「荒城の月」といった「日本的悲壮美の世界における一つの点景としての城」「廃墟の美」といったイメージが立ち上げられている。澁澤龍彦にとっては、これが、日本の城として記憶に根強い印象であるようだ。安土城も址である以上、澁澤が抱くこのイメージと大きな径庭はあるまい。

しかし、澁澤は、「私は必ずしも、これらの悲壮美や廃墟美を担わされた日本の城のイメージには、それほど心をそそられることがなかったような気がする」ともいう。「私には性来、幾何学的な建造物にひどく心をそそられる傾向があって、その傾向は現在でもまったく変りなく、イスラムふうの円屋根や中世ヨーロッパの城郭に好んで少年の日の夢を投影させた」と述

べる澁澤は、「早い話が、日本では円形のプランをもった建造物が、歴史のどの時代を見ても、ほとんどまったく造られていないというのは特徴的なことではないだろうか」と、幾何学的な構造に対する自らの強い関心を明かし、それとの差異から日本的建造物（城）の特徴に迫ろうとするのである。

「日本のいわゆる山城」が、「円筒形と直方体とを組み合わせたような感じの、一般のヨーロッパやイスラムの城とはあまりにも異質なのである」とする澁澤にとって、西欧の基準は、日本の城を押し量るものさしとなっていくよう。「I」の導入部では、「破風造りの瓦屋根が幾層にも積み重なって、上へゆくほど小さくなり、巨大な五重ノ塔のような趣きを見せている天守閣などは、ヨーロッパ人の合理主義には、とても考えられないパロック的な発想だったにちがいない」とされ、西欧的な合理的思考と「パロック的な発想」との対比により、日本の城が解釈されてもいる。ただし、西欧を基準とした対比的な構造は、澁澤の他のエッセーにも多く見られる特徴ではある。

たとえば、同じく日本の風景に関するエッセーである、「日本列島南から北へ」の第二編「火の山」でも、阿蘇山の火口を間近に見た澁澤は、「通俗フロイト心理学を持ち出すまでもなく、火と性欲、火山と性欲とのあいだには、どうやら密接な関

係があるようである」として、次のように語っている。

サド侯爵の小説『悪徳の栄え』には、ヴェスヴィオ火山の火口縁で、二人のレスビアンが噴火を眺めて昂奮し、狂態の限りをつくすという場面がある。私はサドの物語を読んだとき、何か非現実的な印象を拭い切れなかったものがあるが、こうして実際に、そば近くから、休みなく活動する火山と対面してみると、初めてそれが実感として理解できたような気がするのだった。たしかに、土と火の要素をふくんだ火山の活動から、エロティシズムの秘密を透視することができるとは、なかなかならなかつた。

阿蘇山の火口縁に佇みながら、澁澤は、『ゲートの『イタリア紀行』を思い出し、「火山の死の誘惑にとらわれて生命を落した」プリニウスを想起してもいる。しかもそこから、プリニウスが実際に命を落としたとされる、イタリアのヴェスヴィオ山の噴火へと話題が移され、「リットン卿の歴史小説『ポンペイ最後の日』に、この大災害の模様は生々しく描き出されている」と注釈される。阿蘇山を見聞する紀行文は、ヴェスヴィオ山とのアナロジーを意識されつつ、フロイトやサド、ゲート、

プリニウスらを介して生成されている。これらの、西欧を枠組みとした観点から、阿蘇山の風景が見直されるといってもよいだろう。

参照項としての西欧は、風景の再発見を促す契機となっている。『城』の「I」では、幾何学的な造形に強い関心が注がれていたが、安土城といえども日本の城であるため、それを始点とした類推の連鎖は、やはり困難であるといわざるをえない。しかし、安土城については、「さまざまの意味から、中世と近世とのターニングポイントに立つ象徴的な城なのであり、幻の城であればこそ、いっそう私たちの想像力を掻き立てるのである」とされている。むしろ、想像力によって失われた安土城が幻視されていく過程に、重きが置かれているのである。

さらに、「I」では、フロイスの『日本史』によって、織田信長と安土城との歴史的な事実がたびたび確認されている。「このイエズス会士の報告を読むにおよんで、勃然として、安土城に対する興味を掻き立てられたのだった」とも述べられており、フロイスの『日本史』が、安土城について語る動機であったとも読める。「ヨーロッパや中国からの影響も云々されている謎の中心の天守は、江戸時代このかた、多くの学者によって何度となく復原の試みが行われてきたらしいのに、いまだ決定的な

ものを見ていない状態である」という安土城の特徴も、「幻の城であればこそ、いっそう私たちの想像力を掻き立てるのである」と、紀行の動機形成につながっていた。西欧からの視座と想像力とは、この紀行文の根幹を担っている。ここにおいて、西欧を基準とする類推の連鎖は、風景の再発見を促す緒となり、紀行文の枢要を作り上げている。

とはいえ、ここではエッセーの導入に相当する部分であり、その様態は紀行文と呼びがたい。実際の旅行に基づく体験・感想などが不可欠である。「I」では、それに該当するのが、全体の四分の一ほどであり、紀行文としては少ないほうであるかもしれない。

「I」の記述によれば、澁澤は、タクシーで彦根から安土城址に向かっている。安土山へいたる街道沿いの景色について澁澤は、「瘤の三つある駱駝のごとし」というのが、彼ら宣教師たちの安土山を見ての印象だったようだ」と『日本史』の内容をふまえたうえで、自らが見た安土山を「どう見ても「瘤の三つある駱駝」には見えない」という。「ヨーロッパ人と私たちとの感覚の相違かとも思うが、誰が見たって駱駝は駱駝だろうじゃないか、あんな駱駝があるものか」と批判的な言葉が続けられているものの、西欧を鏡に自身の見聞を照らし返す言説で

はあろう。あるいは、フロイスの言葉を、実体験としてなぞり、検証していくかのような行程でもある。

安土城址に到着したあとは、黒金門跡、二の丸跡、台所曲輪を経て、天守跡に向かって山を登っていく過程が語られていく。安土城址の入り口に立ち、一歩ずつ石段を登り始める箇所は、西欧的建築との対照から日本の城について批評した導入部とは、文体の性質も変わってくる。

見上げると、高い石段は鬱蒼たる松や杉の林のあいだに、ひんやりと薄暗く、どこまでも続いているように見える。訪れる者は誰もいなくて、私たち三人だけである。運転手を下に待たせておいて、私たちはゆっくり石段をのぼりはじめた。この石段は、たしかに信長自身が足で踏んだにちがいない石段、あるいは秀吉や光秀や、柴田勝家や丹羽長秀が足で踏んだにちがいない石段なのである。いや、そればかりではない、フロイスやオルガンティーンものぼったであろう石段だ。

引用部は、素朴な身体的感覚と、歴史に自己を重ねていくような体験の記述といえよう。同時に、「フロイスやオルガンティーン

ノものぼったであらう石段だ」と、観点としての西欧も加えられていた。また、天守閣址にいたる途中では、「カエデの新緑が一段と目にあざやか」であったり、「ヤマツツジの花の紅紫色が目を楽しませてくれ」たり、「ハルゼミが弱々しい声でジワジワジワ」と鳴くのを聞いたりと、「五月の安土山のフローラやファウナを目や耳にしながら」山道を登っていく過程が記述される。このような文体は、城自体からは離れつつも、先の引用部と同じく、自らの感覚や体験を語る、実体的な〈私〉が前景化したものであろう。

一方、肝心の天守閣については、「フロイスの『日本史』によれば、安土城の天守の各層は、あたかも古代バビロンの七階層のエテメンアンキのように、層ごとに種々の色に塗り分けられていたらしい」と、フロイスの見解が挙げられている。だが、『日本史』には、七層と色分けに関する記述は見られるが、「古代バビロンの七階層のエテメンアンキ」に類する言説はない。ここでは、フロイスの言葉から、「古代バビロンの七階層のエテメンアンキ」がイメージとして想像されているのである。そしてこれに続けて、日本と西欧との観察点の差異が、次のように指摘される。

日本人の記録、たとえば太田牛一の『信長公記』などが、もっぱら天守各層の内部の室内装飾の豪華さについて、微に入り細にわたる記述に力を注いでいるのに対して、ヨーロッパの宣教師たちが、主として天守の外観の美しさ、その形態美や色彩美に鋭い観察の眼を向けているのは注目すべきであらう。

日本と西欧との対比によって、内部装飾ではなく、あくまでも「外観の美しさ、その形態美や色彩美」に焦点が当てられている。濫澤がエッセーの冒頭で自ら述べた、日本の城の建築様式とは似付かない、「古代バビロンの七階層のエテメンアンキ」のような建造物が、安土山に残った廃墟に幻視されているのだろうか。フロイスの言葉によって明度を増した、荘厳な外観のイメージは、「戦闘用の城というよりも、むしろ権力誇示のための城」「権力意志を演出するための建築空間」といった、「すでに多くの論者が指摘している」結論に落ち着いている。しかし、そこまでの経路は、西欧から安土城を問い直すという想像力の発露が主眼となっていた。したがって、「I」において安土城址をめぐる記述は、廃墟を訪れ、在りし日の姿を想像し、その幻想を辿る紀行文になっているともいえよう。自由な想像力が、西

欧との対比をきっかけとして展開されているのである。

『城』の「I」は、後半になると、実際の体験を語る内容からは離れ、話題は主に信長や安土城の歴史的な推察に移り、紀行文とは呼びがたい体裁となる。だが、たびたびフロイスを手がかりとしたり、「信長とその妹お谷の方（お市の方）」との関係は、どうしても私に、あのイタリア・ルネサンス期のチェーザレ・ボルジアとその妹ルクレツィアとの関係を連想させずにはおかない」と述べたりと、西欧からの視線を介するエッセーが続いていることに変わりはない。また、信長とお市の方については、「ヨーロッパですと、妹との近親相姦という噂の立つところですよ」と会田雄次氏が或る座談会（『批評日本史・織田信長』で発言している）のを受け、「会田氏の頭のなかには、チェーザレとルクレツィアの関係が二重写しになって思い浮かんでいたにちがいない」と推断されている。あるいは、「昭和四十九年十二月十五日、名古屋工業大学教授の内藤昌氏が新発見の資料に基づいて、従来から謎とされてきた、安土城天守の復原図を完成した」ということが新聞紙上に大きく報道された」と同時代の研究状況に触れ、この内藤の見解に対する「東京大学助手の建築史家、宮上茂隆氏」の反論によって自らの「文学的幻想」が「完膚なきまでにたたきつぶされてしまった」と

も語られているが、しかし、エッセー全体を通して示されているのは、その「文学的幻想」である。

学術的な成果よりも、西欧を視座とした「幻想」が重視されているのは明らかだ。「I」では、日本と西欧とが自在に接続されている。つまり、日本と西欧との並列化および統合化が、『城』を支える論理である。だからこそ、「古代バビロンの七階層のエテメンアンキ」という「文学的幻想」に、安土城は結実したのである。

三、信長からサドへ

澁澤が、フランスのラコストにあるサドの居城址を目指して日本を出発したのは、昭和五二年六月七日であった。安土城址を訪れてから二週間ほどしか経っていない。欧州への旅行は九泊一〇日であったとのことだから、一カ月にも満たない期間に、澁澤は、廃墟と化したふたつ城を訪ね、その体験をエッセーに昇華させていることになる。

「I」と同じく「II」も、まずは概念的な話題から始められる。ここで澁澤は、自らを「カステロフィリア（城砦愛好）」と称し、彼がこれまでにエッセー等で扱ってきた、さまざま歴史上の

人物や作家、作品（の主人公）には、この言葉で一括できるような傾向がある者もいたとされている。サドはその代表的な存在に位置付けられるわけだが、他の作家や人物における「カステロフィリア」としての特徴を挙げ、説明したうえで、濫澤は次のようにまとめている。

おそらく城とは、何よりもまず、専制君主の夢想のための場所なのだ。権力意志を一点に凝集するための場所なのだ。しかしこの場合、専制君主は必ずしも現実の専制君主である必要はあるまい、というのが私の意見である。現実の専制君主でなくても、空想裡の絶対権力に酔うことは可能なのだ。少なくとも文学の領域に現れたかぎりでは、城はつねに、失われた権力のイリュージョンをふたたび醸成するのに役立つように見える。サドもベックフォードも、ユイスマンスもピアズレーも、そのような何らかの喪失の体験の上に、極端なカステロフィリアの夢を築きあげた作家たちではなかったろうかと私は思う。

「専制君主の夢想のための場所」という言葉は、「I」で安土城を評した、「権力誇示のための城」「権力意志を演出するための

建築空間」に通底しよう。一見、まったく異なる印象を受けるであろう、信長とサドとは、「専制君主の夢想のための場所」としての城を媒介に、濫澤のいう「カステロフィリア」として統合されているのである。

濫澤が、サドの居城を訪れた当時は、「城の現在の所有者が、サド家とはまったく縁のない人である」ため、「新たに石を積んで、崩れた城壁を補修しようとした」痕跡があり、「新しい石は歴然と白く、しかも煉瓦のように凄然と置いて、はなはだ面白みがない」廃墟は廃墟のままのほうがよいような気もした」と評されている。「入口の扉はびったり閉ざされたまま」「残念ながら、その他の城の入口にもすべて、嚴重に木の板が打ちつけてあって、城の内部へは入れないようにして」あったという。だが、問題は、城そのものの状態などではなく、そこから、濫澤が、どのような想像を広げていったかである。

『城』の「II」では、まず、目前に現れたサドの城について、「小さな窓のある四角い塔と、崩れて壁面だけになってしまった城の外壁とが、一つながりになって丘の上にそびえているのだ。崩れて細長く残った壁面の残骸は、眺める場所によっては、ルネ・マグリットの描く鳥の頭のように見えないことはない」と語られている。マグリットは、しばしば濫澤のエッセーにそ

の名が登場する画家であるが、崩れた壁面を、自家葉籠中のものへと置き換えていくような、イメージの操作を読み取るのも不可能ではあるまい。ともあれ、「廃墟は廃墟のままのほうがよいような気もした」と述べられているように、廃墟であることは、安土城址と同じく、想像力を刺激する要素として重視されていよう。

また、「I」では、フロイスの『日本史』が繰り返して参照されていたが、「II」では、ジルベール・レリーの言葉がたびたび引用される。「やがて侯爵の邸の下、幽霊が見張り番をしているいくつかの廃屋に沿って、打ち捨てられた大地の村を私たちは通ることになる」というレリーの言葉を引く澁澤は、「幽霊が見張り番をしている」とは、うまいことを言ったもので、崩れたサドの城の周囲の森閑たる家々の感じをよく表現していると思つた」との感想が続けられている。あるいは、「ジルベール・レリーがサドの伝記を書くために、しばしばラコストに通っていたころ（一九四〇年代）」と比較されて、「どうやらここ三十年で、事情はすっかり変わってしまったようだ」と感得されたり、城が立つ台地からの眺めについては、「リュベロン山脈のなだらかな長い稜線が走っている。「横になった女神のなだらかな肉体の線を青空にくっきりと描き出す、なつかしの

リュベロン山脈」とジルベール・レリーが言っている通りだ」と同意されたりする。そして、「ここから眺める風景は、最も美しい地中海適風景の一つであろう」というレリーの見解に対しては、「さすがだな、と私は思った」と記されるのである。

「I」において、幻視のための補助線であったフロイスの引用とは異なり、「II」におけるジルベール・レリーの参照は、知識として有する既知の情報と、実体験として身体的に看取される目前の情報との、一致と差異との確認になつていよう。書齋派を自認した澁澤ならではの観測であるともいえるだろう。しかし、同時に、「往時をしるばせるものは何もないが、野生の草花が咲きみだれ」た城の庭園跡である台地で、澁澤は、「花を摘む趣味はないが、この時ばかりは、どういふものか夢中になつて花を摘んだ」と語っている。「ジャン・ジュネの愛したエニシダばかりでなく、ラヴェンダーもヒナゲシも立麝香草も咲いている。日本でよく見るネコジャラシ、ワレモコウ、アザミにそっくりな花も咲いている」なかでも私をとりわけ喜ばせたのは、小さな赤い花冠が五角の完全な星形をした、日本では一度も見たことがないような珍しい草であった」と、そこに群生する草花や、自らの知識と照合しえない未知の植物に大きな関心を寄せてもいるのである。

フランスの台地に「日本でよく見る」草花を重ねながら、「夢中になって花を摘み、さらには、「とうとう来たんだな」「うん、とうとう来たんだよ」と、「心のなかで、無意味なトートロジーの自問自答を繰り返していた」と、澁澤はいう。花を摘むという行為を介して、強い感動をとまなう、熱に浮かされたかのようなふるまいと心情とが表されている。これも、「I」で「五月の安土山のフローラやファウナを目や耳にし」ていたように、旅の経験を身体的に感受するさまを語った言説といえるだろう。

この旅は、ラコストからボンニューへと向かい、アビニヨンのホテルまで戻ったところで、「ベッドにひっくりかえって昏々と眠った。人間一日の経験と感動の量には限界があつて、それ以上の量をつめこむのは無駄だと思った」と記述されている。

「今、この文章を書いている私の目の前に、ラコストの丘で摘んできた花々がある」と、それらを「きれいなドライフラワー」にして保存しているのを見ると、文体自体は抑制された筆致ではありつつも、澁澤が、非常に大きな感動を得たことが伝わる。「城」の「II」は、そのあと、「ここでちょっと寄り道をして、アルルの民族博物館で見た怪獣タラスクについて述べておこう」と、ラコスト以外にも触れられるが、後半は、「ラコストのサドの城について、もう少し想像と推理の翼をひろげてみた

い。そして出来得べくんば、サドのカストロフィリアにおける現実と空想との平行関係を明らかにしたい」という考察にいたるのだから、やはり章全体としては、サドの居城址を起点とした、独自の推論および夢想が基調となっている。紀行にともなう身体的な実感とは、新たな風景の発見と想像力の増進とを促しているように。その意味において、「I」と「II」とは、異なる旅であつても、明らかに連続した紀行文である。

四、城と泉鏡花

『城』の「III」は、姫路城の見聞が発端となっている。しかし、「III」においては、ほとんどこの旅行の実体験などが語られていない。「I」や「II」とは、その点でかなり体裁を異にするともいえる。「I」では、彦根城と姫路城とについて、「安土城に対する執心の大きさに圧倒されてしまつて、あとの二つの城の印象は、はなはだ稀薄なものになつてしまつた」とあり、これが、姫路城での見聞が記されていない原因でもあるのだろう。「III」で直接的な実体験が語られている箇所は非常に少ないが、冒頭に、「姫路城の五層の天守閣のてっぺん」には、「広い板敷きの間（十三メートル×九メートル）の中央に、小さな祭

壇が築いて」あり、「この祭壇にふと目をとめた私は、桜の紋所を染め抜いた幕の上の額に刑部大神と記してあるのを見て、「ああ、これが世にいうオサカベさんか」と思った」とある。

だが、文章は、すぐに刑部大神の伝承や考察となり、そこから鏡花の「天守物語」〔新小説〕大正6・9へとつながっていく。章全体としては、姫路城自体よりも、「天守物語」を端緒にした城の構造、それを契機とする、サドやジュール・ヴェルヌへの連想となっているのである。ここに、これまでと同様の紀行文としての特徴は読み取りがたい。むしろ、「もう城について書くことはあらかた無くなってしまうようなので、今年の四月、妻と一緒に若狭から丹波丹後地方を車で旅行した時に目にとまった、ちよつと面白いお寺の本堂の建築」について語られている。「Ⅲ」末部のほうが、前節までに論じてきた紀行文の体裁と合致している。ただし、鏡花への関心は、『城』の論理における日本と西欧との接点や、姫路城の見聞を介した想像力の発露を表しているように見える。

鏡花へといたる構成は、姫路城の刑部大神、伝承に諸説ある「オサカベ」の考察、『老嫗茶話』における次のような興味ぶかいエピソードの引用、「このエピソードに出てくる十二二重の気高き女こそ、すなわちオサカベ姫であろう」との推論を

経て、それが、「天守物語」に「たくみに採り入れられている」というものである。旅行時の印象を、澁澤は、「天守の窓から眺めると、眼下に近代的なビルの立ち並んでいる明るい姫路の街が望まれるし、すぐ近くには新幹線が走っている」と、姫路城を取り巻く風景について「鏡花好みの妖怪変化の跳梁する余地も、とても残っていそうには思われなかった」としている。廢墟から想像をめぐらせた「Ⅰ」と「Ⅱ」とは、やはり大きく異なる。だから、実際の風景への感銘はなく、より幻想的な物語世界の情景を語っていったのである。

姫路城と鏡花とを結び付けた澁澤は、「天守物語」の構造を次のように評価する。

しかし考えれば考えるほど、鏡花が戯曲の舞台を白鷺城の天守台五層に選んだということは、鏡花ならではの非凡な着想だったと思わざるを得ない。この戯曲は、城の天守の垂直構造をほとんど完璧に生かした作品だと信じられるからである。

「天守物語」における空間構成の特色として従来指摘されているように、縦の構図がまず問題となる」と述べる笠原伸夫は、

さらに、「天守の棟薨や鯨、山嶽の遠見、樹々の梢といった上方への眼差しを欠くことは出来ない。階段口から伺われる冥々たる階下への視線もまた不可欠である」と、天守を中心とした上下への指向を指摘している。「垂直構造」はすでに自明の理解ではあるが、濫澤は、上下というよりも、主に上昇的な構図で把握し、さらにそれをサドとの接点とする。

垂直構造で思い出したが、サドの『悪徳の栄え』に出てくる巨人ミンスキーの城について、現代フランスの女流評論家ベアトリス・ディディエがおもしろいことを言っている。すなわち、サドの作中の城は本質的に垂直的で、しかも下降的だと言っているのだ。天上世界に通じているような『天守物語』の上昇的な城とは、その意味でヴェクトルが正反対だとも言えよかるうか。

「垂直構造」における上昇と下降との対比によって、「正反対」ではありながらも、「悪徳の栄え」と『天守物語』とが接続されるこの構図を鮮明に浮かび上がらせるためには、やはり「上昇的な城」として『天守物語』の空間は理解されねばなるまい。

「Ⅲ」では、「天守物語」の構造について、「地上と天守とは、

一方が醜い人間の世界、他方が美しい妖怪の世界として、ここではつきり対立する」、「俗世間と妖怪世界の対立」が「城のもつ空間構造とびつたり重なり合う」とされている。また「この戯曲の舞台は終始一貫、妖怪たちの住む白鷺城の天守の第五層であって、観客の眼に城の下層や地上世界が見えるわけではない」ため、「天守の下の人間の世界」は、「妖怪の眼にしか見えない」のであり、したがって、「人間世界のごたごたを、擲揄と侮蔑の眼で眺めおろすことができる特権的な場所、そういう場所に戯曲の舞台が設定されている。それを私は垂直構造と呼んだ」と解釈される。

下方の「俗世間」「地上世界」「人間世界のごたごた」は、「擲揄と侮蔑の眼」で見下され、物語自体が常に上部の「美しい妖怪の世界」を指向する構造と捉えられている。昭和五二年の旅行時における現実世界は、「眼下に近代的なビルの立ち並んでいる明るい姫路の街が望まれるし、すぐ近くには新幹線が走って」おり、鏡花の物語世界に似つかわしくないと批難されていた。上昇性をとりわけ指向する『天守物語』の解釈は、このような現実世界の払拭も果たしているのではなからうか。姫路城はもちろん廃墟ではないが、そこにもはや望むことの叶わない風景が幻視されていくという点では、安土城やラコスト城を語

る姿勢にも通じていよう。

「Ⅲ」では、「悪徳の栄え」に描かれる城の下降的な空間性に続き、その「城とメカニックとの関係、あるいは城と自動人形との関係」から、ジュール・ヴェルヌの「カルパティアの城」という小説が連想され、論じられている。城の構造や性質を媒介にして、鏡花、サド、ヴェルヌの並列化がなされているのだ。結果、「Ⅲ」では、「今まで見てきたように、城のテーマには、どうやら権力の問題が分かちがたく絡みついているらしいということが理解されるであろう」とあらためてまとめられる。ここで、上昇指向をとまなう、「天守物語」の特権化された「妖怪の世界」は、信長やサドらの城と同じく、「専制君主の夢想のための場所」「権力意志を演出するための建築空間」にも統合されたといえよう。

五、語り直される〈日本〉

『城』は、「Ⅰ」と「Ⅱ」とが、廃墟とそこから惹起された夢想とをめぐる紀行に支えられ、「Ⅲ」が、建築的な構造を手がかりに幻想的な物語空間を追究していた。また、全体としては、フランスへの旅行体験である「Ⅱ」を「Ⅰ」と「Ⅲ」とが挟む

ことで、日本と西欧とを往還するかのような構成となっている。特に「Ⅰ」と「Ⅲ」とは、各章内においても日本と西欧との接続は繰り返されていた。それは、西欧を観点とした、日本の城（ないしは風景）の再評価にもなっているだろう。なかでも、安土城を語る言説にその傾向は顕著であった。風土的な特性に縛られるのではなく、積極的に西欧との接点を求め、自在に幻像を立ち上げていく恣意的なまなざしが、語り直された〈日本〉の景色を、読者の眼前にも広げていくのである。

城に関する記述ではないが、「Ⅲ」の終わりに記されている、若狭神宮寺への紀行文も、「Ⅰ」や「Ⅱ」と同類の文章にほかならない。ここでは、この寺の住職に案内されながら、中村兵衛という大工の手になる装飾や建築様式を見学していくさまが語られている。「和様唐様天竺様の折衷というわけです」と様式について説明されるなか、澁澤は、柱の装飾に対して「ギリシアのイオニア式の柱頭の飾りみたいです。それともササン朝ペルシアかな。日本ばなれしていますね」という感想を述べたり、「本堂の天井を支えている肘木」に施された彫刻を問われて「ヒンドゥー教のガネーシャみたいだけど、よく分かりませんね。豚かな」と答えたりしている。西欧に限定されはしないが、日本的ではない建築様式への関心が、「ちよつと面白い

お寺の本堂の建築」として綴られているのである。

若狭神宮寺の本堂自体は、後ろに聳える山との視覚的な関係から、遠近法に基づき建てられているという。住職に「建物はややうしろへ傾いているように見えないかね」と問われ、「明らかに遠近法を利用した視覚上のトリック」に気付いた澁澤は、「天文二十二年」というと、ちょうどヨーロッパのルネサンスのころですね。中村兵衛という大工には、西洋建築の心得があったのでしょいか」と質問し返している。「Ⅲ」では、そこから西欧の遠近法へと話題が移り、「若狭神宮の本堂の縁の下の柱の列とやや似ているように思われるのは、たとえばポロミーニ設計のローマのスパルダ宮殿の庭園にある、長さ八メートルばかりの柱廊ではないだろうか」と推測される。西欧建築との対比を経る把握は、安土城の幻視と同一の構図であろう。さらに、「ヨーロッパふうの幾何学的な空間概念をとり入れて成功した希有な例として」、「この若狭神宮寺の中村兵衛の遠近法」がさざえ堂に匹敵するものと評価されているのである。

若狭神宮寺の見聞のあと、「Ⅲ」では、「お水送りの鶴ノ瀬」へと向かい、「何の変哲もない谷川の急流」の、「水が青く淵のようによどんでいる部分」に、「ここで水を汲むのは爽快だろうと思われる。神々しい感じもしないではない」といった素朴

な感想が表されている。ただし、この風景も、即座に「ヨーロッパでも、水の滾々と湧き出る泉は、つねに聖所として尊崇されてきたようだ」と、ケルト人やギリシア、ローマの水にまつわる伝承に接続され、この文章は、次のような「私の意見」に集約されるのである。

おそらく火の行事にも水の行事にも、世界の民俗にストリートに結び付くものがあるにちがいない、というのが私の意見である。せまい特殊のなかに躊躇しているのはもうたくさんだ。ひろびろとした普遍性のなかで日本を見直そう、というのが私の意見である

「世界の民俗」を、〈世界の建築〉〈世界の風景〉に換えるならば、その「ストリートに結び付くもの」を〈日本〉の風景として語り直してきたのが、『城』の軌跡であろう。

紀行文としては、見聞に対する率直な感性も重要である。だが、それも「ストリートに結び付くもの」を求める志向によって、西欧的な観点を通過した、幻想へと並列化および統合化されていた。すなわち、『城』所収諸篇の、初出時における風景の再発見という試みは、目の前に広がる現実の景色に限定され

ず、音、匂い、手触りといった身体感覚や、伝聞、知識などを頼りにしつつ、失われたもののうえに想像を組み上げていく行為である。『城』は、西欧中心的な思考となつてはいるが、「せまい特殊のなかに踟躕している」のではない、素朴な身体感覚との連続体として、広く、自由な想像力が、「日本」を捉え返すまなざしを、読者に投げかけているといえるだろう。

【註】

- (1) 引用は、『城』第二章(Ⅱ)による。
- (2) 『滞欧日記』は、巖谷國士の編集により、平成五年二月に河出書房新社から刊行された。なお、『滞欧日記』は、「Ⅰ 一九七〇年 九月一日～十一月四日」、「Ⅱ 一九七四年 五月十六日～六月一日」、「Ⅲ 一九七七年 六月二日～七月二十三日」、「Ⅳ 一九八一年 六月二十三日～七月二十三日」の全四章立てとなつており、瀧澤龍彦が四度のヨーロッパ旅行の際に書き残したノートを収めている。
- (3) 巖谷國士「解題」〔瀧澤龍彦全集(第17巻)〕によれば、このエッセイは、「新劇」の「長期にわたるシリーズ企画『日本風景論』の三番手として、飯島耕一「港町」、中井英夫「墓地」につづいて登場したものである。そのため各回とも標題の右上に、小さく「日本風景論(3)」というタイトルが加えられている。
- (4) 巖谷國士「解題」〔瀧澤龍彦全集(第17巻)〕では、「日本風景論」という一種の紀行文シリーズは、「新劇」の編集長・和氣元の発案であり、取材旅行に出發するまでの経緯は、次のように紹介されている。

このような枠組みでなにか長篇エッセイをお願いしたいともちかけたところ、瀧澤龍彦は即座に「城」を書きたいとこたえた。旅行取材をするのであれば、まずなによりも織田信長の安土城址。ついでに彦根城、姫路城あたりも見にゆきたいものだ——と、話ほとんどん拍子にすすみ、同年五月二十二日に新幹線で出發。和氣元と写真家の井上修(文中「W氏 および「I氏」として登場)の二人が同行した。

- (5) ルイス・フロイス著／松田毅一・川崎桃太郎訳『完訳フロイス日本史3 安土城と本能寺の変——織田信長篇Ⅲ』(中公文庫、平成12・3)の「第三章(第二部三三章)」には、安土城について次のような記述が見られる。

(城の)真中には、彼らが天守と呼ぶ一種の塔があり、我らヨーロッパの塔よりもはるかに気品があり壮大な別種の建築である。この塔は七層から成り、内部、外部ともに驚くほど見事な建築技術によつて造営された。事実、内部にあつては、四方の壁に鮮やかに描かれた金色、その他色とりどりの肖像が、そのすべてを埋めつくしている。外部では、これら(七層)の層ごとに種々の色分けがなされている。あるものは、日本で用いられている漆塗り、すなわち黒い漆を塗った窓を配した白壁となつており、それがこの上ない美観を呈している。

- (6) 笠原伸夫「評釈『天守物語』」(国文社、平成3・5)

*本稿における『城』所収諸篇の引用は、すべて河出書房新社版『瀧澤龍彦全集』第17巻に拠る。なお、引用に際しルビは省略した。